

「ガ/ノ」交替現象についての一考察 —古代・現代コーパスを対照して—

坂野 収 (青山学院大学)

On Ga/No Conversion : A Diachronic Corpus-based Study

Osamu Banno (Aoyama Gakuin University)

1. はじめに

三上(1953)以来、「ガ/ノ」交替について、さまざま議論されてきた¹。しかし、現代語中心で、内省に基づく議論が主であった。幸いにして、充実されつつある通時コーパスが利用できるようになったので、可能な限りコーパスを利用して検討をしてみた。報告の要旨は次の通りである。

- ① 中古語の主語の格表示(主格)はゼロ格(ϕ)である。しかし、連体形節等では「ガ」または「ノ」が用いられることがある。これら主語表示「ガ・ノ」は属格であることが、コーパス分析から確認できる。
- ② 中古語の連体形節等における「ゼロ格(ϕ)/ガ・ノ」交替と、現代語における「ガ/ノ」交替は、言語学的に言えば「主格/属格」交替であり、同一現象である。
- ③ 通時コーパスによって、中古と現代とで「主格/属格」交替現象を比較検討すると、属格主語の出現は、質的にも比率的にも変化はみられない。従って、主語への属格付与メカニズムも変わっていないと考えることができる。
- ④ 「主格/属格」交替は、名詞性(あるいは、名詞素性)を帯びた節でのみ生ずる現象である。この名詞素性を持つ節を、主要部 C が名詞素性[+N]をもった節タイプの一つと位置付けて、生成統語論の立場で、「主格/属格」交替現象を説明する。

2. 中古語の主語表示としての「ガ・ノ」

連体形節等に於いて、主語の格表示として格助詞「ガ」と「ノ」が用いられることがあるのはよく知られている。これらの格助詞の種類について考察する。

2.1 属格「ガ・ノ」の上接語分布

中古語では、属格助詞「ガ」の上接語は限定的であり「ノ」のそれは一般的と言われて²いるが、その分布を中納言(「歴史コーパス」)で検索³・調査した。

結果の概要を、表1とそれをグラフ化した図1に示す。共通の上接語も散見されるが、どちらかが主力の場合が多く、真に共通なものは「君」(表1* 印の所)くらいである。結論をいえば、互いの上接語の交わりは非常に小さく、ほぼ相補分布しているといっても差支えない⁴

¹ Harada(1971), Miyagawa(1993), Watanabe(1994), Hiraiwa(2001b), 大島(2010)など。

² 野村(1993)、((2011) pp. 75)など。

³ 検索条件: 短単位検索、[名詞 or 代名詞] + [格助詞が or の](key) + [名詞 or 代名詞]

⁴ 分布の内容についての考察は、本稿の目的とは関係しないので立ち入らない。

表1 属格「ガ・ノ」の上接語分布

上接語	の	が	上接語	の	が
こ	2140		大殿	69	
人	899		院	68	
世	864		梅	67	(6)
そ	857	(4)	右	63	
か	716		大臣	62	
心	391		君	*60	*(66)
もの	203		衣	51	
例	199		琴	50	
花	196		上	49	(2)
物	177		今	48	
秋	167		いしへ	41	
よろづ	151		歌合	41	
山	146		下	39	(2)
身	133		子	39	(2)
宮	132		松	39	(2)
女	132		弁	36	(1)
中	132		まこと	33	
春	129				
昔	126		わ		(629)
夜	122		おの		(63)
前	119		誰		(37)
方	117		これ		(30)
ほど	110		まる		(14)
こと	105		それ	2	(13)
後	102		帯刀	4	(10)
殿	102		我		(7)
おほかた	100		あこぎ		(5)
東	98		小萩		(5)
事	97	(1)	人麿		(5)
少将	90		惟光	1	(4)
日	86	(1)	貫之		(4)
御簾	85		仲忠		(4)
中将	82		浅茅	1	(3)
納言	77	(3)	た		(3)
空	74		平中		(3)
宰相	72	(1)	典葉	2	(2)
			2960種	142種	
			95%	5%	
			23344個	1091個	
			96%	4%	

表2 主語表示「ガ・ノ」の上接語分布

上接語	の	が	上接語	の	が
人	592	(3)	葉	15	
こと	138		北の方	14	
心	115		露	14	
宮	59		御髪	13	
世	59		事	13	
月	52		水	13	
ほど	42		使	12	
もの	42	(1)	色	12	
方	42		心ざし	12	
身	39		中将	12	
人々	38		かぐや姫	11	
花	36		翁	11	
雪	34		子	11	
君	*33	*(12)	車	11	
心地	31		神	11	
さま	29		昔	11	
涙	28		大将	11	
気色	27				
大臣	27		わ		(94)
中	27		誰		(22)
殿	26		おの		(13)
女	24		まる		(7)
院	23		それ		(6)
何	22		あこぎ		(5)
風	22		なにがし		(5)
声	21		かれ		(4)
夜	21		た		(4)
上	20		右近		(3)
親	19		衛門		(3)
雨	18		汝		(3)
音	18		これ		(2)
男	18		監		(2)
日	18		人麻呂		(2)
ありさま	17		帯刀		(2)
者	16		典葉		(2)
物	16		背子		(2)
			893種	71種	
			93%	7%	
			3763個	251個	
			94%	6%	

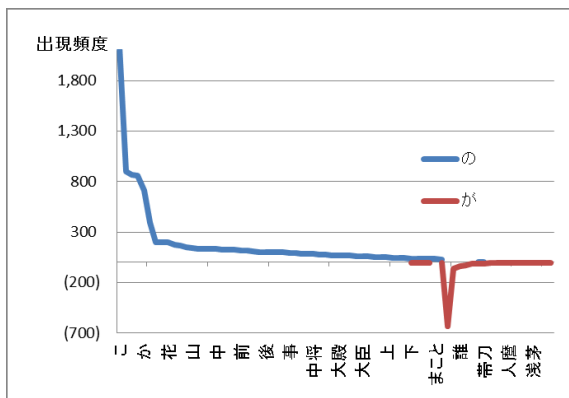


図1 属格「ガ・ノ」の上接語分布

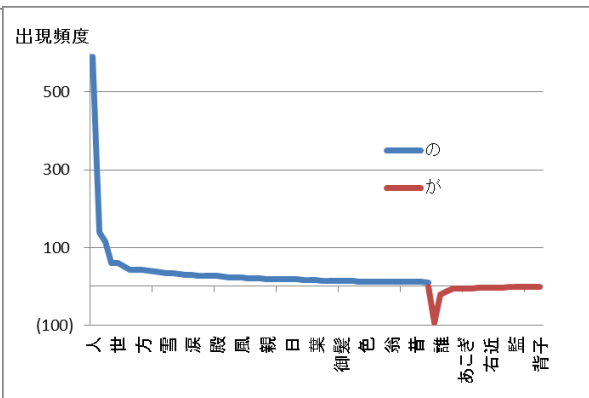


図2 主語表示「ガ・ノ」の上接語分布

2. 2 主語表示「ガ・ノ」の分布

連体形終止節、已然形終止節（以降、連体形節、已然形節と称する）、ならびに「未然形+ば」節では、主語表示に「ガ・ノ」が現れることがある。この主語表示の「格」の種類は何であろうか。本稿では、終止形終止節（平叙文）の主語表示⁵の格を主格とする。

主語表示「ガ・ノ」の上接語の分布を、「中納言」を使って検索⁶・調査した。結果を表2と図2に示す。上接語の分布が同じである上に、特殊環境（連体形節など）にしか現れないことから、これらの格助詞は属格とみても差支えない。Frellesvig ((2010) pp. 127-131) では、これらを「属格主語表示」(genitive subject marking)としていることは妥当である。以降、属格表示された主語を**属格主語**と称する。

3. 中古語と現代語の「主格／属格」交替

3. 1 中古語の格交替

中古語では、連体形節、已然形節、そして「未然形+ば」節に於いては、(1)～(3)に示すように、いわゆる「主格(ゼロ格 ϕ)／属格(ガ・ノ)」交替が存在する。

(1) 連体形節の場合

- | | |
|-------------------------------------|---------|
| a. [いと胸 ϕ いたかるべき]ことなり | (源氏物語) |
| b. [こがるる胸 の 苦しき]に思ひあまれる炎とぞ見し | (源氏物語) |
| c. 花すすき[君 ϕ なき]庭に群れたちて | (古今和歌集) |
| d. [鏡にて影見し君 が なき]ぞ悲しき | (大和物語) |
| e. [梅の香 ϕ をかしき]を見出してものしたまふ。 | (源氏物語) |
| f. [菊の花 の うつろへる]を折りて、男のもとへやる | (伊勢物語) |
| g. [日 ϕ たくる]ままに、いかならんと思したるを | (源氏物語) |
| h. [日 の かさなる]ままにいみじくなむ、 | (落窪物語) |

(2) 已然形節の場合

- | | |
|--|--------|
| a. 迎へに[人 ϕ あれば]、今またもまゐり来む | (大和物語) |
| b. [うちとくまじき人 の あれば]、こなたの火は消ちたるに、(枕草子) | |

(3) 「未然形+ば」の場合

- | | |
|--------------------------------------|--------|
| a. [琴なども習はず人 ϕ あらば]、いとよくしつべけれど、 | (落窪物語) |
| b. [また見知る人 の 侍らば]こそあらめ、 | (落窪物語) |

3. 2 現代語の格交替

現代語では、連体修飾節、補足節⁷などに於いて、(4)に示すように「主格／属格」交替（通称「ガ／ノ」交替）が現れるが、已然形節（の一部）と「未然形+ば」の後継である仮定形節では、属格主語表示は生じない。

⁵ 中古の平叙文の主語表示は「ゼロ格(無形)」である(金水・他(2011) pp. 94-5, Frellesvig (2010) pp. 129)。

⁶ 検索条件：短単位検索、[名詞 or 代名詞]+[格助詞が or の](key)+[動詞 or 形容詞]

⁷ 益岡・田窪(1992, pp. 182)

(4) 現代語の格交替

- | | | |
|-------------------------------|------------|-----------------|
| a. [山田 が /の 買った] | 本 | 連体修飾節 |
| b. [秋刀魚 が /の 焼ける] | 句い | 連体修飾節 |
| c. [山田 が /の 来たの] | を思い出した。 | 補足節 |
| d. [山田 が /の 買ったの] | を食べた。 | 補足節 |
| e. [リンゴ が /の 皿の上にあったの] | を食べた。 | 補足節 (主要部内在型関係節) |
| f. [息子 が /の いう] | ままに、任せていた。 | 副詞節 |

(1) と (4) を比較すれば分かるように、連体修飾節、補足節、そして副詞節など、連体形節に限れば、**属格主語が許される環境は、中古語も現代語も同じである。**

3. 3 中古語と現代語における属格主語の出現割合

中古と現代とで、主格主語と属格主語の生ずる比率をコーパスで調査した。結果を図3に示す。縦軸の節タイプに対応した、主格主語と属格主語の出現割合を横棒で表してある。

重要なことは、連体形節に於いては、**主格/属格交替現象は、中古語と現代語とでは量的(出現比率)にもほとんど変化していないことである。**

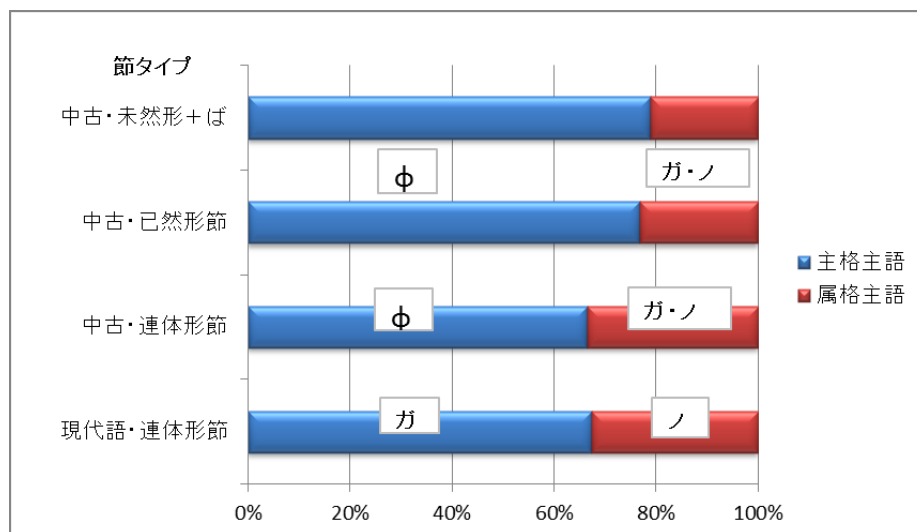


図3 中古・現代語の属格主語と主格主語の割合

検索条件を注⁸に示した。検索結果には、目的に合わない文も多く含まれており、それらの削除(手作業)が完璧でないことや、一定範囲、一定条件(随意に交替が可能と思われる文脈)での検索であることから、図3の数値は、**概略傾向を示す数値である**と認識されたい。

⁸ 対象コーパス：中古語＝平安時代データ、現代語＝BCCWJ；コアデータ
各検索条件は次の通り。ただし連体形節での検索条件のみ記した(いずれも短単位検索)。已然形・未然形はこれに準ずる。
①中古・属格主語表示＝[名詞 or 代名詞]+[ガ or ノ](key)+[動詞 or 形容詞]+[(key から3語以内)連体形] (付録参照)
②中古・主格主語表示＝[名詞 or 代名詞](key)+[動詞 or 形容詞]+[(key から3語以内)連体形]
③現代語・主語表示＝[名詞 or 代名詞]+[ガ or ノ](key)+[動詞 or 形容詞]+[(key から3語以内)連体形]

4. 属格主語が生ずる環境

現代語において、平叙文、疑問文、そして命令文などには、属格主語は現れない。属格主語が現れるは典型的な例は、主に(4)で述べたような、連体修飾節や補足節である。さらに、(5)(6)に示すように、副詞可能名詞や副助詞などの補部である連体形節でも現れる。これも、中古と現代で同じである。

(5) 副詞可能名詞が使われている例

- a. [御都合のよろしい] **おり**に、お訪ねするつもりです。 大西巨人(2003)
- b. [時間の許す] **かぎり**、この男の顔を見ていたかった。 藤原万璃子(2002)
- c. [隼人の見る] **ところ**、木谷伝八の腕はなかなかのものである。 えとう乱星(2005)

- a'. [中将のなき] **をり**に見すれば、心憂しと思へど (源氏物語)
- b'. [水の音の聞こゆる] **かぎり** は心のみ騒ぎたまひて、 (源氏物語)
- c'. [さばかりねたげなりし人の見る] **ところ**もありなどこそは思ひはべりつれど、
(源氏物語)

(6) 副助詞等が使われている例

- a. [彼女の帰宅する] **まで** に、決着をつけておきたかった。 折原一(1992)
- b. [共産中国の認めた] **よりも**さらにいっそう重大化しているのではないかと
(ロバート・A・スカラピノ 2003)
- c. [私の思う] **に**、これは芸術的衝動というよりもむしろ～ 澁澤龍彦(2003)

- a'. [月の傾く] **まで** あばらなる板敷に臥せりてよめる (古今和歌集)
- b'. [御使いの申す] **よりも**、いますこしあわただしげに申しなせば、(源氏物語)
- c'. かならずしも [我が思ふ] **に**かなわねど、 (源氏物語)

従来から、属格主語が現れる説明の一つとして、(非明示も含めて)名詞性の主要部(被修飾部)の存在を仮定してきた。しかし、(6)の例文、ならびに中古の補足節や已然形節を考えたとき、名詞的主要部の存在が必須だとは言えない。**属格主語が生ずるのは、名詞的特性(名詞素性)をもつ節そのものの存在が重要である。**

已然形節、「未然形+ば」については、属格主語が現れることから、連体形節に近い名詞性を帯びた節と考えられてきた⁹が、図3でもそれが裏付けられると同時に、これらが連体形と同源あるいは、連体形+αであったとの説明¹⁰もなっとくできる。現代語では、これらが存在しないこともあり、対照分析のターゲットとしては、連体形節に重点をおいて説明する。なお、「連体形節+が」という主語表現が存在するが、この「ガ」は補文標識であるという説¹¹もあり、今後の検討課題にしたい。

5. 属格主語が生ずるメカニズム

5. 1 先行研究概観

⁹ ホイットマン(2009)

¹⁰ 早田(2010)、金水・他(2011) pp.86-87.

¹¹ Frellesvig(2010) pp.128-129.

属格主語に関する先行研究は、ほぼ三分類できる。Miyagawa(1993)を中心とした主要部 DP 仮説、Watanabe(1994)の WH-agree 仮説、そして Hiraiwa(2001b)の連体形認可仮説である。詳細は省き、概念のみの説明とする。

主要部 DP 仮説は、関係節をその典型として、連体形節の外側に付加された主要部 DP の存在を仮定し、LF において、主語が主要部 DP の指定部に移動して属格が認可されるという主張である。前節で述べたように、中古と現代の実例をみるに、必ずしも外部主要部があるわけではない。

WH-agree 仮説は、WH 移動が認められる節に於いて、Tns-Agr-C システムにより属格付与が可能になるという説である。主要部 DP からの属格認可は必要ないが、WH 移動があるからには主要部の存在を前提にしていることになる。さらに、一般の疑問文といった WH 移動が関係している文で属格主語が生じないのも説明できない。

最後は、連体形認可仮説であるが、Hiraiwa は、述部連体形のみが属格主語を認可すると述べている。しかし、独立用法の活用形と接続用法の活用形との区別¹²がつけられていないために、例えば「山田が/*の来るはずだ」のような、いわゆる人魚構文(角田 2012)では属格主語が許されないことを説明できない。

このように、いずれの理論も十全とはいえない。そこで、以下述べるような、節タイプとしての連体形節を提案する。

5. 2 連体形節によるメカニズムの説明

前節において、属格主語が生ずるのは、名詞素性の節の存在が重要であると述べた。そこで、この名詞素性をもつ節も、節タイプ(Clausal Type or Clausal Mood)¹³の一つであると規定し、それを改めて「**連体形節**」と称することにする。そして、複雑な理論を立てることなく、この**連体形節の存在のみが、属格主語が生ずる必要十分条件であると主張する**。そして、属格主語の派生を生成文法(特に、ミニマリスト・プログラム)の立場で説明する。

文(節)は、項構造(Argument Structure)を派生する vP(動詞句)相とその上部に位置し表現形式(Expression Structure)を決める CP 相から構成される。CP 相の主要部 C が節タイプを決める素性(Illocutionary force=発話内力)を持っているとされている(Radford 1997 pp. 148)。日本語においては、節タイプと述部活用形(独立形式の活用形)は密接な関係にあり、主要部 C は述部の活用形も決定する力を持つと仮定する¹⁴。

終止形節の一つである平叙文と比較して、連体形節の派生の概要を説明する。図 4 は平叙文の基本的節構造、図 5 は連体形節のそれである。

図 4 に於いて、平叙文 CP の主要部 C (補文標識)は無標であって、主語に主格を、述部に終止形を認可する素性[Nom, Conc1]を持ち、時制句(TP)の主要部 T を経由してそれぞれを認可する。一方図 5 では、名詞素性[+N]を持つ主要部 C が選択されている。[+N] 素性を持つ節主要部(C[+N])には、[Nom/Gen, Adnom]素性が与えられているとする。それが TP の主要部 T を経由して、主語に、主格または属格を、随意に認可し、述部には連体形を認可して連体形節を派生する(時制素性[Tns]はどちらにも共通にあるので省略した)。

¹² 金水・高山・岡崎・他(2011) pp. 79.

¹³ 節タイプ(あるいは「節ムード」とは、平叙文(declaratives)、疑問文(Interrogatives)、命令文(directives)などを言う(cf. Narrog (2009) pp. 135-158)。

¹⁴ 活用形と句構造との関係については、研究の緒についたばかりである(cf. 三原 2011、三原・仁田 2012)。拙稿では、節タイプと独立形式の活用形との関係を提案している。

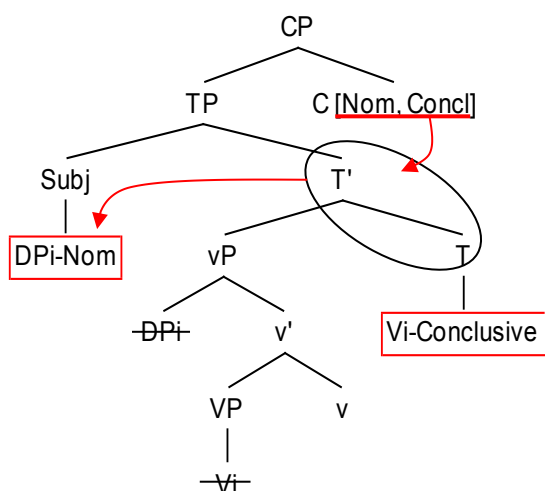


図4 終止形節(平叙文)の基本構造

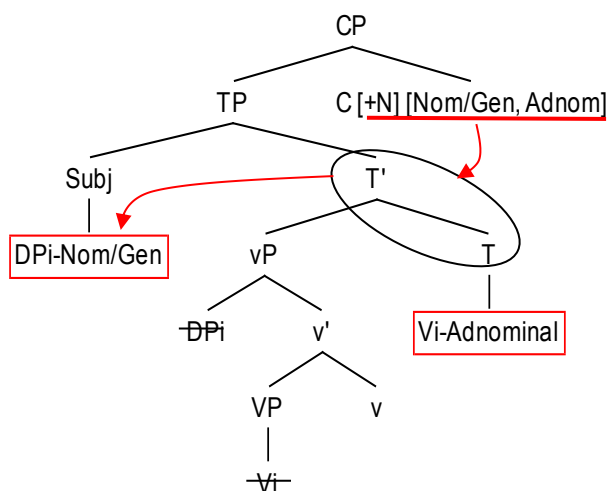


図5 連体形節の基本構造

このように、派生の段階で、節主要部として、名詞素性[+N]を持つ補文標識 C が選択されれば、その節(CP)は連体形節になり、属格主語が可能となる。

現代語の補語節では、補文標識 C に有声の「の」の存在が一般的である。形容動詞を除いて、終止形の連体形への吸収によって終止形と連体形の区別ができなくなったので、それらの区別と、節境界を明示するために「の」が挿入されたという説があるが、これは[+N]素性の音声化とも考えられる¹⁵。

6. 付随する問題

6. 1 主格目的語

属格付与の特殊な場合として、(7) のよう状態動詞構文における主語あるいは目的語の属格表示がある。

- (7) a. 山田 **が** 英語 **が**/?**の** できること
- b. ??山田 **の** 英語 **が**/**の** できること

内省としては、(7 a) は許容の範囲にあるが、(7 b) の許容性については意見が分かれるところである。

現代語コーパスの検索結果を(8~10)に示す。

(8) 「が~が」の組合せ

- a. だれも **が** 予想 **が** つくように、盲流が各地に起こり、 王 文山 (1997)
- b. 彼 **が** 気 **が** 済むまでゲームをやっている間 浦賀和宏 (2001)
- c. 俺 **が** 関心 **が** あるのは、誤診だけだ。 北方健三 (2001)

(9) 「が~の」の組合せ

- a. 彼 **が** 人気 **の** あるわけがわかるような気がした。 立川ありあ (1992)
- b. 田中**が** 元気**の**いいところは田中の側近ナンバーワンを自認していた。
本澤二郎 (1993)
- c. 一介の中将くらい **が** 歯**の** 立つ相手ではない。 水沢蝶児 (1991)

¹⁵ 外池滋生氏の示唆による。

(10) 「の～の」の組合せ

- a. 自分たちの納得の できることを、自分たちの見通しの中でやれる
山本冬彦 (2002)
- b. 「じゃ、私の 気の 済むようにさせて…ねっ」 小林光恵 (1998)
- c. 浪人兵法者の 齒の 立つような手合いではない、 司馬遼太郎 (2003)

残念ながら、現在のところ、「の～が」の組合せが見つかっていない(筆者の見過ごし)。[[NP の] [NP が] VP] なる組合せは、[[NP の NP]が VP] の読みが最優先される解析上 (parsing) の制約により実例が稀少なだけで、統語上の制約とは思われない。

結論として、格表示の四つの組合せに関しては、統語的には随意に選択できると仮定しておきたい。「の～が」の組合せは、認知(解析)上の制約があり、発話が困難と考える。

主語と目的語へ同時に格付与できるのは、「格付与の多重一致理論」(Multiple Agree (Hiraiwa 2001a)) の適用例と考える。

6. 2 他動性制約

現代語では、(11) のような、属格主語のあとにヲ格目的語が介在すると容認度が著しく低下すると言われている。これは、統語的制約か解析上の制約か、いろいろ議論されてきたが、未だに明確な説明は見当たらない。Watanabe(1994)、Hiraiwa(2001b)では、他動性制約と称して、統語的な制約として議論している。

(11) 山田 が/*の 本を買った店

中古・現代コーパスの検索結果を(12)に示す。

(12) 「属格主語～ヲ格目的語」の組合せ

- a. 秋田市では、博士を 蝶の 取り巻くこと、大略斯の通りであった。 泉 鏡花 (2004)
- b. 人の 花 ϕ 見たる形かけるをよめる (ϕ : ゼロ対格) 古今和歌集
- c. 朱買臣 が 妻を 教えけむ年には… 枕草子
- d. 隣の家より、風の 雪を 吹き越しけるを見て、 古今和歌集

確かに、現代語では、例文を見つけるのは困難で、倒置文一件(12a)だけであるが¹⁶、中古語では容易に探し出せる(12b.c.d.)。従って、統語的制約ではなく、解析上の制約であると考えることが出来る。

属格主語と述語との間に介在物があると、容認度が低下するのは、連体修飾としての「の」が卓立しているため、名詞等が後続すると主語としての解釈が困難となるためと思われる。

7. おわりに

中古語と現代語のコーパスを使った対照分析と、内省だけに頼らない用例検索により、次のことを主張した。

- ① 連体形節における、「主格/属格」交替現象の本質は、中古と現代とでは何の変化も生じていない。従って、現象が生ずるメカニズムも同じである。

¹⁶ Frellesvig((2011) pp.130)によれば、上代においては、主語とヲ格目的語が共存するときは、必ず、ヲ格目的語が主語より前に位置するとのことであるが、現代語と似ていて興味深い。更なる探究が必要である。

- ② 格交替は、名詞素性をもつ連体形節そのものの機能に由来する現象である。
- ③ 主語と述語との間の、目的語などの介在物も、属格主語の派生を妨げるものではない。妨げがあるとすれば、認知的（解析上の）条件である。
- ④ ただし、属格による主語表示が全く随意であるかは、検討の余地があり、今後の検討課題である（これこそコーパスの出番である）。

このような結果が得られたのも、身近に利用できる通時コーパスのお陰である。益々整備が進み、利用者が多くなれば、すばらしい成果も増えることが期待できる。

文献

- B. Frellesvig(2010) *A History of the Japanese Language*, Cambridge U.P.
- S. Harada(1971) “Ga-No Conversion and Idiomatic Variations in Japanese” 『言語研究』 60, pp. 25-38. 日本言語学会
- 早田輝洋(2010)「上代語の動詞活用について」『水門— 言葉と歴史』 22, 水門の会
- K, Hiraiwa(2001a) “Multiple agree and the defect intervention constraint in Japanese” In *The proceedings of the HUMIT2000*, MITWPL#40, pp. 67-80. Cambridge, MA.
- K, Hiraiwa (2001b) “On nominative-genitive conversion” In *A view from Building E39*, MITWPL#39, pp. 65-123. Cambridge, MA.
- ホイットマン、ジョン(2009)「日本祖語の名詞化形と連体形及び已然形の再建」『日本言語学会 第138回大会 予稿集』 pp. 80-85. 日本言語学会
- 菊田千春(2002)「が・の交替現象の非派生的分析—述語連体形の名詞性」『同志社大学英語英文学研究』 74, pp. 93-133.
- 金水 敏、高山善行、岡崎友子、他(2011)『シリーズ日本語史3 文法史』 岩波書店
- 近藤康弘 (2009)『日本語記述文法の理論』 ひつじ書房
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法 - 改訂版 - 』くろしお出版
- 三上 卓 (1953)『現代語法序説』刀江書院 (復刊 1972 くろしお出版)
- 三原健一、仁田義雄 編 (2012)『活用の最前線』くろしお出版
- 三原健一 (2011)「活用形と句構造」『日本語文法』 11-1, pp. 71-87.
- 三原健一、平岩建 (2006)『新日本語の統語構造』松柏社
- S, Miyagawa(1993) “LF case-checking and minimal link condition”, MITWPL #19 *Papers on case and agreement*, pp. 213-254. Cambridge, MA.
- H, Narrog (2009) *Modality of Japanese*, Amsterdam, John Benjamin P.C.
- 野村剛史(1993)「古代から中世の「の」と「が」」『日本語学』 12-11, pp. 23-33.
- 野村剛史(2011)『話言葉の日本史』吉川弘文館
- 大島資生 (2010)『日本語連体修飾構造の研究』 ひつじ書房
- A, Radford(1997) *Syntactic theory and the structure of English*, Cambridge U.P.
- M. Saito(2012) “Case Checking/Valuation in Japanese: Move, Agree or Merge?” *Nanzan linguistics* 8, pp. 109-207.
- S. Tonoike(1991) “The comparative syntax of English and Japanese: Relating unrelated languages” In Heizo Nakajima(ed.) *Current English Linguistics in Japan*, pp. 455-506. de Gruyter
- 外池滋生(2011)“A Proposed Excorporation Analysis of Head Movement and the Organization of Grammar” 慶應言語学コロキウム (2011/06/04)

- 角田太作(2012)『国研プロジェクトレビュー』9, pp3-11. 国立国語研究所
 A, Watanabe (1994) “A cross-linguistic perspective on Japanese nominative -genitive conversion and its implications for Japanese syntax” In *Current topics in English and Japanese*, ed. Masaru Nakamura, pp.341-369. Hituzi Shobo
 山田昌裕 (2010)『格助詞「ガ」の通時的研究』ひつじ書房

関連 URL

- 国立国語研究所(2012)「日本語歴史コーパス」<https://maro.ninjal.ac.jp/>
 国立国語研究(2009)「現代日本語書き言葉均衡コーパス」
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

例文出典 (引用順)

- 大西巨人(2003)『三位一体の神話』光文社
 藤原万璃子(2002)『ワイルド・ローズ』心交社
 えとう乱星 (2005)『ほうけ奉行』ベストセラーズ
 折原一(1992)『灰色の仮面』講談社
 ロバート・A・スカラピノ(2003)『資料体系アジア・アフリカ国際関係政治社会史』パピルス出版
 澁澤 龍彦 (2003)『イコノエロティシズム』河出書房新社
 王 文山 (1997)『七つの中国』文藝春秋社
 浦賀和宏 (2001)『記憶の果て』講談社
 北方謙三 (2001)『小説現代』35:14, 講談社
 立木ありあ (1992)『恋愛の市場心理』講談社
 本澤二郎 (1993)『裏から見た自民党派閥』エール出版社
 水沢蝶児 (1991)『獅子と薔薇の銀河』朝日ソノラマ
 山本冬彦 (2002)『学童保育実践の記』川島書店
 小林光恵 (1998)『ぼけナース』メディアワークス
 司馬遼太郎 (2003)『大盗禅師』文藝春秋社
 泉 鏡花 (2004)『新編泉鏡花集』岩波書店

付録

(中古語・連体形節に於ける属格主語の検索フォーム)

▼ 前方共起条件の追加

前方共起1 (キーから 1 語) キーと結合して表示 ▶ この条件をキーに ■ この共起条件を削除

WHERE句 が 品詞 LIKE "名詞%" OR 品詞 LIKE "代名詞%" ■ 短単位の条件の追加

キー (--- 10 語) キーを未指定

WHERE句 が 語彙素 LIKE "の%" OR 語彙素 LIKE "が%"

AND 品詞 の 中分類 が 助詞-格助詞 ■ 短単位の条件の追加

後方共起1 (キーから 1 語) キーと結合して表示 ▶ この条件をキーに ■ この共起条件を削除

WHERE句 が 品詞 LIKE "動詞%" OR 品詞 LIKE "形容詞%" ■ 短単位の条件の追加

後方共起2 (キーから 3 語以内) キーと結合して表示 ▶ この条件をキーに ■ この共起条件を削除

活用形 の 大分類 が 連体形 ■ 短単位の条件の追加

▲ 後方共起条件の追加